

天使と悪魔と高橋さん

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

高橋

天使

悪魔

高橋の部屋。悪魔と天使が高橋に謝っている。

悪魔 すいません。ホント。申し訳ないと思っています。

高橋 いや、そんな謝ってもらっても意味ないんで。

悪魔 でも。いやあの、ホント。この子(天使)ね、今回が現場初めてやったんですよ。

高橋 ここに来てるって時点で、仕事として来てるんやろ？ 前に言いましたよね。今

度こういうことがあったら解約するって。

悪魔 解約だけは、勘弁してもらえませんか。ホント続けていかな困るんです。

高橋 それはそっちの都合でしょ。こっちは関係ないことですから。おたくらがただやりたいただけってことでしょ。

悪魔 それはそうなんですけど。でも僕ら的にはね、一生懸命やってて。その一生懸命のあまりに。

高橋 君らの一生懸命とかそんなんは知らんし。僕とは関係のないことやから。

天使 すいません。

高橋 さっきからすいませんすいません言うてるけど、何が悪かったんかわかってます？

悪魔 それはこの子に聞いたんですけど、高橋さんの部屋に何人が友達遊びに来てて、高橋さんのお気に入りの子だけお酒飲んで眠って。

高橋 うん。

悪魔 ほんで、その女の子に手を出すかどうかで悩んでるってセンターの方に連絡があったから、この子とうちの後輩の子(悪魔)が派遣されることになって。で『囁き』やってる最中に……。あの、これは言い訳になるかも知れませんが、前にね、高橋さ

ん家で『囁き』やった人が、『囁き』の声が大きすぎて、その声で対象が起きてしまったって話を聞いてたんで、ホント二人で小声で小声でって気をつけてたんですよ。うん。それはわかるよ。注意してるなっていうのが見てとれたから。

悪魔 注意がそっちにいつてしまつて、それで足下にファミコンあるの気づかずに踏んでしまつたって。

高橋 プレステな。

悪魔 ああ、プレステ。

高橋 声が大きいか以前の問題やんか。プレステ踏んで壊すつて。大体、君らこの部屋、どうやって入つて来たん？

悪魔 それは僕ら、壁をすり抜けられるんで。

高橋 つてことは実体がないからやろ。何でプレステ踏んで壊れるねん。

悪魔 ホントそれはすいません。きちんとそれは弁償しますんで。

高橋 いやいや、弁償とかして済む問題と違つてしょ。データかて消えてもつたし。結局、女の子目が覚めてしまつたやんか。

悪魔 すいません。

高橋 大体、君ら、ホンマに申し訳ないって思ってる？

悪魔 それはもう、はい。

高橋 じゃあ、何で昨日のうちに謝りに来んかったんかな？

悪魔 いや、あのそれは。

高橋 ホンマに申し訳ないって思うてるんやったら、来ると思うんやんか。

悪魔 はい。全く仰る通りです。

高橋 ちよっと甘いんちゃうかな。そういう常識的なことができてないっていうのは。

悪魔 ホントはすぐに伺うつもりやったんですけど。ただねあの、この子と昨日来たう

ちの後輩はまだこの仕事に慣れてないんですよ。

高橋 だから、そういうのはそっちの事情で僕には関係のない所やって言ってるんです

よ。てか、君の後輩って子は何で今来てへんの？

悪魔 すいません。家の方で不幸があつて。今日はちよっと。

悪魔 これ、あの、お詫びの印なんですけど。

悪魔、白黒の縁起の悪そうな包装紙に包まれた菓子折を差し出す。

高橋 そんなん、別に要らないんで。

悪魔 あの、高橋さん。この子ももうひとりの子も反省してるんで。これからはこういうことがないようにしていくと思うんですよ。

高橋 いやもう、これからとかじゃなくて。もういいんで。

悪魔 いや、ホンマお願いですから。

高橋 大体その、『囁き』って言うの？ それするのに何でぐるぐる回らなあかんのかな。じっとしても囁くくらいできると思うんやけど。

悪魔 それは、あの、高橋さんがどっちにするかをより悩んでもらうためには、どうしても囁きながら高橋さんの周りをぐるぐる回らなあかんかったんで。

高橋 理由を聞いてるんやけど、それは理由になってないよね。ぐるぐる回ったらより悩むのかという辺りがさ、理解を超えてるよね。それに、何で僕がね、より悩まなあかんのか？ それ自体がまず余計なお世話やんか。

悪魔 確かに余計なお世話かもしれないんですけど。でもね、それだけじゃないと思うんですよ。

高橋 あのね、君らの所と契約したときにはね、ラブコメの漫画の主人公みたいな恋愛

ができるって聞いたんやんか。せやから、そういう女の子を紹介してくれるとか、そう思うやんか。それがさ、ことあるごとに天使と悪魔が出てきて。そら確かに漫画にあるで。そういうの。けど、これ。こっちに何のメリットもないやんか。

悪魔 いやあの、メリットはちゃんとあるんですよ。

高橋 あるかどうかを判断するのはこっちやから。大体この前なんか、悪魔が二人来てもうて、天使がおらんかったんやんか。君らは知らんかもしれんけど。二人して同じこと言うて、ハモってたしさ。悪魔二人やと理性は蔑ろやんか。

悪魔 あの時ちやうか？ 君んとこの先輩がやめるいうてドタバタしてたとき。

天使 あ。

高橋 君らんとこの事情なんか知らんし。大体ぐるぐる回るのに、何で二人逆に回るん？ 狭いんやからぶつかるやん。同じ方向に回ったらええんちやうのん？

天使 おっしゃる通りです。

悪魔 あの、解約しかないんでしょうか。もう一回チャンスもらえたら。

高橋 ホンマ、もうええから。

悪魔 そこを何とか。

高橋 あんまりしつこく言うんやったら警察行くけど。

天使、泣き出す。

天使 本当にごめんなさい。

高橋 …君らも初めてでとまどってたっていうのもわかるし。これから頑張っていかなあかんねやろって気持ちも、少しはあるねんけど。

悪魔 ?

高橋 迷ってるねんけど。

天使 あ。

高橋 迷ってるのに、何もなしなん？

悪魔 あ、いえ、あの。(天使に) ほら。

天使 うん。…ぐしつ。(鼻声) ゆ、許してあげたら。

悪魔 ぐしつ。(鼻声) ケケケ俺達許したらまたつけあがるぜ。(素で) あの、これは違いますよ。本心じゃなくなってる。あの、わかってもらえますよね。もうわかったから。君ら他にも行かなあかんとこあるんやろ。

悪魔

はい。

高橋

これからの君らがどうであるかを見させてもらおうから。

天使

ありがとうございます。

悪魔

ホンマ、すいませんでした。じゃあ、失礼します。

悪魔、去り際にまたプレステを踏む。

悪魔

あ…。

高橋

…。

終わり。